

重篤な副作用として、まれに肝機能障害、腎障害又は無菌性髄膜炎<sup>ずい</sup>が起きることが知られている。

#### ④ イソプロピルアンチピリン

解熱や鎮痛の作用が比較的強いが、抗炎症作用は弱く、他の解熱鎮痛成分と組み合わせで配合される。

ピリン系<sup>xviii</sup>と呼ばれる解熱鎮痛成分である。1960年代半ばまでは、イソプロピルアンチピリン以外のピリン系解熱鎮痛成分も、一般用医薬品のかぜ薬や解熱鎮痛薬に配合されていたが、ショック等の重篤な副作用が頻発したため用いられなくなり、現在は、イソプロピルアンチピリンが一般用医薬品で唯一のピリン系解熱鎮痛成分となっている。

なお、医療用医薬品では、現在でもイソプロピルアンチピリン以外のピリン系解熱鎮痛成分も用いられており、ピリン系解熱鎮痛成分によって薬疹<sup>しん</sup>（ピリン疹<sup>しん</sup>と呼ばれる）等のアレルギー症状を起こしたことがある人は、使用を避ける必要がある。

【生薬成分】 生薬成分の解熱又は鎮痛の作用の仕組みは、化学的に合成された成分（プロスタグランジンの産生を抑える作用）と異なることから、アスピリン等の解熱鎮痛成分を避けなければならない場合にも使用できる。

#### ① ジリュウ

フトミミズ科又はツリミミズ科に属するカッショクツリミミズ等を乾燥した動物性生薬で、解熱作用があり、古くから「熱さまし」として使用されてきた。ジリュウのエキスを製剤化した製品は、「感冒時の解熱」が効能効果となっている。

#### ② ボウイ

ツツラフジ科のオオツツラフジのつる性の茎及び根茎を用いた生薬で、鎮痛作用がある。日本薬局方で定めるボウイを煎じて服用する製品は、「筋肉痛、神経痛、関節痛」が効能効果となっている。

#### ③ シャクヤク

ボタン科のシャクヤク又はその近縁植物の根を用いた生薬で、鎮痛作用があり、内臓の痛みにも効果がある。シャクヤクを単独で製剤化した製品はなく、他の成分と組み合わせで配合される。

#### ④ その他

解熱に働く生薬成分としてオウゴン、カッコン、ゴオウ、ボウフウ、サイコ等、鎮痛に働く生薬成分としてボウイ、コウブシ、センキュウ、ボタンピ等を組み合わせて配合された製品もある。これら生薬成分に関する出題については、XIV-3（その他の生薬製剤）を参照して作成のこと。

<sup>xviii</sup> これに対して他の解熱鎮痛成分を「非ピリン系」と呼ぶことがある。アスピリンやサザピリンは、成分名が「～ピリン」であっても非ピリン系の解熱鎮痛成分であるが、一般の生活者では誤ってピリン系として理解されていることも多い。

抗炎症作用がある生薬として、カンゾウ（又はそのエキス）が配合されている場合もあり、カンゾウに関する出題、カンゾウを含有する医薬品に共通する留意点に関する出題については、Ⅱ－１（咳止め・痰を出しやすくする薬）を参照して作成のこと。

(b) 鎮静成分

解熱鎮痛成分の鎮痛作用を助ける目的で、ブロムワレリル尿素、アリルイソプロピルアセチル尿素のような鎮静成分が配合されている場合があり、いずれも依存性のある成分であることにも留意する必要がある。また、鎮静作用がある生薬成分として、カノコソウ等が配合されている場合もある。

これら成分に関する出題については、Ⅰ－３（眠気を促す薬）を参照して作成のこと。

(c) 胃酸を中和する成分（制酸成分）、健胃成分

解熱鎮痛成分（生薬を除く。）による胃腸障害から胃粘膜を保護することを目的として、ケイ酸アルミニウム、酸化マグネシウム、水酸化アルミニウムゲル等の制酸成分が配合されている場合がある。この場合、胃腸薬のように、胃腸症状に対する薬効を標榜することはできない。制酸成分に関する出題については、Ⅲ－１（胃の薬）を参照して作成のこと。

健胃作用を有する生薬成分としてケイヒ、ショウキョウ等が配合されている場合もある。それら生薬成分に関する出題については、Ⅲ－１（胃の薬）又はⅩⅣ－３（その他の生薬製剤）を参照して作成のこと。

(d) カフェイン類（カフェイン、無水カフェイン、安息香酸ナトリウムカフェイン等）

解熱鎮痛成分の鎮痛作用を高めるほか、中枢神経系を刺激して頭をすっきりさせたり、疲労感・倦怠感を和らげることを目的として配合されている場合がある。なお、カフェイン類が配合されていても、鎮静成分の作用による眠気が解消されるわけではない。

カフェインの働き、主な副作用等に関する出題については、Ⅰ－４（眠気を防ぐ薬）を参照して作成のこと。

(e) ビタミン成分

発熱や痛みを直接緩和する成分ではないが、発熱等によって消費されやすいビタミン、例えば、ビタミンB1（チアミン及びその誘導体）、ビタミンB2（リボフラビン及びその塩類）、ビタミンC（アスコルビン酸及びその塩類）等が配合されている場合がある。これら成分に関する出題については、ⅩⅢ（滋養強壮保健薬）を参照して作成のこと。

● 漢方処方製剤

鎮痛の目的で用いられる漢方処方製剤としては、芍薬甘草湯、桂枝加朮附湯、桂枝加苓朮附湯、薏苡仁湯、麻杏薏甘湯、疎経活血湯、当帰四逆加呉茱萸生姜湯、呉茱萸湯、釣藤散等がある。

これらのうち芍薬甘草湯以外は、比較的長期間（1ヶ月位）服用されることがあり、その場合

に共通する留意点に関する出題については、XIV-1（漢方処方製剤）を参照して作成のこと。

また、これらのうち呉茱萸湯以外は、いずれも構成生薬にカンゾウを含んでいる。カンゾウを含有する医薬品に共通する留意点に関する出題については、II-1（咳止め・痰を出しやすくする薬）を参照して作成のこと。

(a) 芍薬甘草湯

下肢の痙攣性疼痛（いわゆる「足がつる」症状やこむらがり）、急な腹痛や胃痙攣の痛みなどのような、急激に起こる筋肉の痙攣を伴う疼痛に適するとされているが、症状があるときのみでの服用にとどめ、連用を避ける必要がある。

まれに重篤な副作用として、肝機能障害のほか、鬱血性心不全や心室頻脈を生じることが知られており、心臓病の基礎疾患がある人では使用を避ける必要がある。

(b) 桂枝加朮附湯、桂枝加苓朮附湯

いずれも関節痛、神経痛に適するとされているが、暑がりでのぼせが強く、赤ら顔で体力が充実している人では、動悸、のぼせ、ほてり等の副作用が現れやすい等、不向きとされている。

(c) 薏苡仁湯、麻杏薏甘湯

薏苡仁湯は、関節痛、筋肉痛、麻杏薏甘湯は、関節痛、神経痛、筋肉痛に適するとされているが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸の弱い人、発汗傾向の著しい人では、悪心・嘔吐、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされている。

いずれも構成生薬にマオウを含んでいる。マオウに関する出題、マオウを含有する漢方処方製剤に共通する留意点に関する出題については、II-1（咳止め・痰を出しやすくする薬）を参照して作成のこと。

(d) 疎経活血湯

関節痛、神経痛、腰痛、筋肉痛に適するとされているが、胃腸が弱く下痢しやすい人では、消化器系の副作用（食欲不振、胃部不快感等）が現れやすい等、不向きとされている。

(e) 当帰四逆加呉茱萸生姜湯

手足の冷えを感じ、下肢が冷えると下肢又は下腹部が痛くなりやすい人における、腰痛、下腹部痛、頭痛、しもやけに適するとされているが、胃腸の弱い人では不向きとされている。

(f) 呉茱萸湯

みぞおちが膨満して手足が冷えやすい人における、頭痛及び頭痛に伴う吐き気、しゃっくりに適するとされている。

(g) 釣藤散

中年以降の人又は血圧が高めの人で、あまり激しくはないが煩わしい慢性の頭痛に適するとされているが、胃腸虚弱で冷え性の人では、消化器系の副作用（食欲不振、胃部不快感等）が現れやすい等、不向きとされている。

### 3) 相互作用、受診勧奨

【相互作用】 一般用医薬品の解熱鎮痛薬は、複数の有効成分を含有している製品が多く、また、一般の生活者においては、「痛み止め」と「熱さまし」は影響し合わないと誤って認識されている場合もある。他の解熱鎮痛薬やかぜ薬、鎮静薬、外用消炎鎮痛薬（一般用医薬品に限らない。）等を併用すると、同じ成分又は同種の作用を持つ成分が重複して、効き目が強すぎたり、副作用が起こりやすくなるおそれがある。

解熱鎮痛成分と酒類（アルコール）との相互作用については、アルコールの作用によって胃粘膜が荒れるため、アスピリン、アセトアミノフェン、イブプロフェン、イソプロピルアンチピリン等による胃腸障害が増強されることがある。また、アセトアミノフェンによる肝機能障害が起こりやすくなる。

ブロムワレリル尿素、アリルイソプロピルアセチル尿素のような鎮静成分が配合されている場合の留意事項についてはI-3（眠気を促す薬）、カフェイン類が配合されている場合の留意点についてはI-4（眠気を防ぐ薬）を参照して問題作成のこと。

【受診勧奨等】 解熱鎮痛薬の使用は、痛みや発熱を一時的に和らげる対症療法であって、それらの原因を根本的に解消するものではない。以下のような場合には、一般用医薬品によって自己治療を図るのではなく、医療機関を受診することが望ましい。

発熱については、激しい腹痛や下痢などの消化器症状、息苦しいなどの呼吸器症状、又は排尿時の不快感等の泌尿器症状等を伴っている場合や、発熱が1週間以上続いているような場合には、感染症やその他の重大な病気である可能性があり、自己判断で安易に熱を下げることで、かえって発熱の原因である病気をこじらせるおそれがある。

関節痛については、歩くとき又は歩いたあと膝関節が痛む、関節が腫れて強い熱感がある、又は、起床したときに関節のこわばりがあるような場合は、関節リウマチ、痛風、変形性関節炎等の病気の可能性がある。

月経痛（生理痛）についても、年月の経過に伴って次第に増悪していくような場合には、子宮内膜症<sup>xix</sup>等の病気の可能性がある。

頭痛については、頭痛が頻繁に現れて、24時間以上続く場合や、一般用医薬品を使用しても痛みを抑えられない場合は、自己治療によって対処できる範囲を超えている。特に、頭痛が次第に増してきて耐え難いような場合や、これまで経験したことがない激しい突然の頭痛、手足のしびれや意識障害などの精神神経系の異常を伴う頭痛が現れたときには、くも膜下出血等、生命に関わる重大な病気である可能性がある。なお、頭痛は、頭痛が起こるのでないかという不安感も含め、心理的な影響も大きいとされている。解熱鎮痛薬は、頭痛の症状が軽いうちに服用するのが効果的といわれているが、症状が現れないうちに予防的に服用することは適切で

<sup>xix</sup> 子宮内膜やそれに類似した組織が、子宮内膜層以外の骨盤内の組織・臓器で増殖する病気

なく、また、頭痛のため解熱鎮痛薬を連用することによって、かえって頭痛が常態化することもある。

### 3 眠気を促す薬

一般的に、はっきりした病気が原因でなくても、日常生活における人間関係のストレスや生活環境等の様々な要因によって、自律神経系のバランスが乱れ、寝つきが悪い、眠りが浅い、いらいら感、緊張感、興奮感、精神不安といった症状が起きることがある。また、それらの症状のため十分な休息が取れず、疲労倦怠感、寝不足感、頭重等の症状を伴う場合もある。そうした症状を生じた場合に、眠気を促したり、精神の<sup>たか</sup>昂ぶりを鎮めるため使用される医薬品を総称して催眠鎮静薬という。

#### 1) 代表的な配合成分等、主な副作用

##### (a) 抗ヒスタミン成分

ヒスタミンは、脳の下部にある睡眠・<sup>せい</sup>覚醒に大きく関与する部位において、神経細胞を刺激して<sup>せい</sup>覚醒の維持・調節を行う働きを担っている。脳内でのヒスタミンによる刺激の発生が抑えられると、神経の興奮が鎮まり、眠気が促される。塩酸ジフェンヒドラミンは、抗ヒスタミン成分の中でも特にそうした中枢作用が強いとされる。

抗ヒスタミン成分を主薬とする催眠鎮静薬は、睡眠改善薬<sup>xx</sup>として、一時的な睡眠障害（寝つきが悪い、眠りが浅い）の緩和に用いられるものであり、慢性的に不眠症状がある人や、医療機関において不眠症の診断を受けている人を対象としたものではない。

睡眠改善薬は、妊娠又は妊娠していると思われる女性は服用しないこととされている。妊娠中に起こる睡眠障害については、ホルモンのバランスや体型の変化等によるものであり、睡眠改善薬の適用対象となる症状ではない。

まれに眠気とは正反対の作用を生じて、神経過敏や興奮などが起きることがある。小児ではそうした副作用が起きやすく、15歳未満の小児は服用を避ける必要がある。

抗ヒスタミン成分を含有する内服薬は、服用後、乗物または機械類の運転操作を避けることとされているが、睡眠改善薬の場合、目が覚めたあとも、注意力の低下や寝ぼけ様症状、判断力の低下等の一時的な意識障害、めまい、<sup>けん</sup>倦怠感を起こすことがある。翌日まで眠気やだるさを感じる際には、それらの症状が消失するまで乗物又は機械類の運転操作を避ける必要がある。

その他、抗ヒスタミン成分に共通する副作用等に関する出題については、Ⅶ（アレルギー用薬）を参照して作成のこと。

<sup>xx</sup> 医療機関において不眠症の治療のため処方される睡眠薬（医療用医薬品）と区別するため、一般用医薬品では、睡眠改善薬又は睡眠補助薬と呼ばれる。